美術月評

〈10月〉

尾形　希和子

自己の内部を凝視　表層の可能性追求

中島イソ子　招待作家展

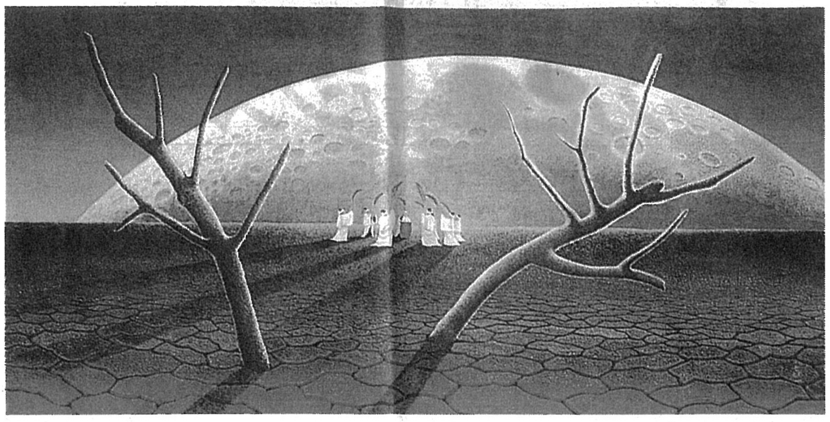
表現の楽しさ伝える

伊江隆人

観賞者との交流図る

加島　治

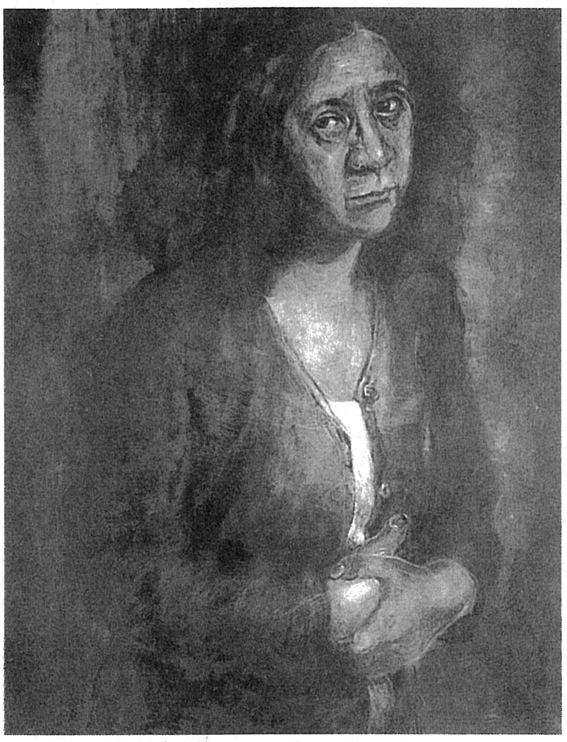
ローマ中心部にパラッツォ・ファルネーゼという、現在フランス大使館として使われている建物がある。十六世紀の巨匠たちによる美しい内部装飾は一般公開されておらず、めったに拝めない。九月のある日、それが一般に公開されたのだが、公開時間直前に門が開いたかと思うと、在伊フランス大使が出てきて、長い列に並んだ一人一人に「ようこそ」と握手をして回った。我々（われわれ）外国人も地元ローマの人も皆感激し、やはりフランスはすごいとうなったものである。フランスは、スペイン広場の上にあるメディチ家別荘を文化会館にしており、その一部は国費留学生の宿舎である。造形芸術専門の留学生にはアトリエも与えられる。アメリカも一等地に同様の施設を有す。日本は文化を外交に利用するのがヘタだと言われるが、美術の宝庫イタリアに留学生や研究者のための文化施設を当然のごとく整備するこうした国々の底力を見ると、根本姿勢が違うのだと嘆息せざるを得ない。



新城喜一「雨乞い」（沖美連展）

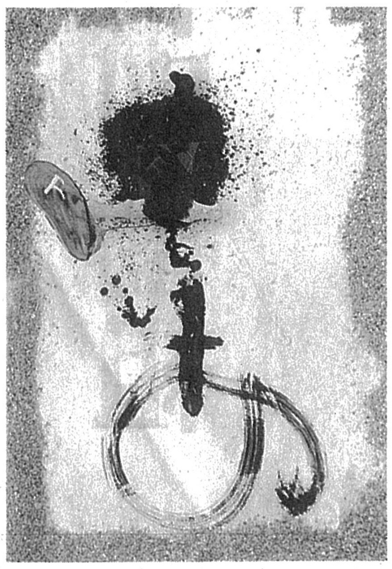
「琉球弧・美の渦流」の一環である「招待作家展」（リウボウホール、10月28日〜11月4日）は、いわゆる抽象作品は難解だという固定観念のゆえか、会場がひっそりとしていた。平面作品の「表層」の可能性にさまざまな形で取り組み続ける作家たちの意気込みが、ピリピリと伝わってくるような空間であり、新垣安雄、永津禎三、永山信春、南部芳宏、真喜志勉をはじめとする面々の作品が一堂に集まるというのも滅多にない機会に違いなく、大変に残念なことであった。

そういえば、美術作品の見方、楽しみ方を教えられる機会というのは実はあまりない。へんに先入観を植えつけられるのはよくない、見たいように見ればいい、というのはもっともだが、たとえば歌舞伎などを鑑賞する時にはやはり最低限の見方を学んでおかなくてはならないのと同様に、学校の美術の時間でも、制作だけでなく鑑賞の仕方を学ぶ機会がもっとあってもいいのではないだろうか。



中島イソ子「自画像」（沖美連展）

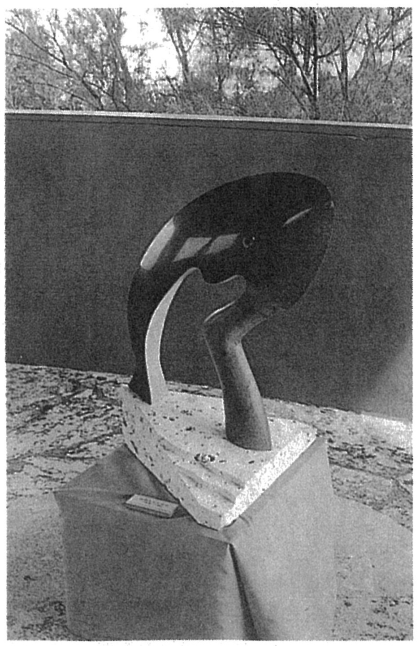
伊江隆人の一連の活動も、美術の楽しみ方について考えさせるものであった。「『扉より』形・濃淡から」と題された室内での展覧会（D'Sギャラリー、10月13〜25日）と連動して、波の上人工ビーチで行われたインスタレーション（10月19〜23日）では、砂浜に並べられた唐紙の上に、太陽の光が貝殻に穿（うが）たれた穴を通して描くいろは文字が、風にゆらゆら揺れていた。沖縄を訪れていたビーチ・サッカー日本代表選手であるという少年たちがサッカーボールを蹴（け）る姿を背景にし、太陽や風という環境までも取り込んだ作品を見ていると、あまりの気持ちのよさにその場を立ち去りがたく感じたものである。



伊江隆人「『扉より』形・濃淡から」

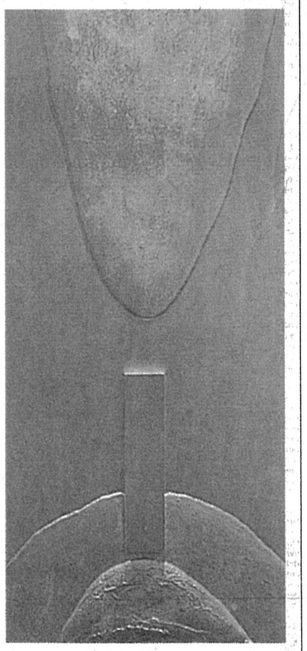
伊江はその前に渡名喜島で、子供たちと共に、ワークショップとインスタレーションも行っている。島には音楽の先生だけで美術の専門の先生がおらず、子供たちに美術による表現の楽しさを教えたいという要請にこたえてのことだという。子供たちは、筆や墨の制作に始まり、漂流物や墨を使って自らが表現することを大いに楽しんだということである。

「加島治展」（10月30日〜11月3日）も、作品を通して人とのコミュニケーションを図るという形の、興味深い屋外展示であった。嘉数台地の頂上にある展望台に設置された石のベンチ上に、武器をモティーフにした彫刻作品が展示されていた。普天間基地を一望できる展望台で、強い風に吹かれ、頭の真上を通る軍用機の轟音（ごうおん）を聞きながら、ほとんどが修学旅行生や公園を訪れる一般の人々であるという来訪者に見てもらう。



加島治「心の武器化」

子供が突進して作品が倒壊するなどのハプニングもあったということだが、フリーマーケットなどを作品発表の場としてきた加島は、そうした見る者との間に交わされるダイレクトなやりとりも含んだ美術の可能性を探っているようである。



新垣安雄「拮抗から」（招待作家展）

新城喜一「雨乞い」などが印象的であった「沖美連展」（那覇市民ギャラリー、10月27日〜11月1日）に、中島イソ子は、また一つ「自画像」を発表している。女性作家の自画像の持つ意味は重いと私は思っている。たとえばシュールレアリスムには多くの女性アーティストたちが参加したが、彼女らの多くは若かったか、あるいは男性シュールレアリストたちのパートナーとしてかかわったこともあり、運動の初期にはアーティストとしての活動を評価されていなかった。のちにアーティストとしての自己を確立していく彼女らの多くが、作品の中にしばしば自画像を挿入している。彼女たちは、従来の「見られ」「描かれる」存在の女性像でなく、自らの意志で見、描く自律的人間としての自分を描いているのである。

中島イソ子の自画像は、深く自己の内部を凝視し、その暗闇（くらやみ）やあるいは狂気の部分までを手加減なく暴こうとしているかに見える。女性作家が執拗（しつよう）なまでに自己を描こうとするのは、男性作家ならば疑われさえしない「意志を持ったアーティストとしての自我」を、未だ認めようとしない社会状況ゆえだと思えてならないのである。

「幸地学展」（那覇市民ギャラリー、10月20〜25日）では、作家が夏を過ごしたというギリシャの島の新シリーズが印象に残った。ギリシャの神話と現代がオーバーラップし、さらにそこに、沖縄的モティーフやテクノロジカルな造形などさまざまなものを融合させている。たとえば、しばしば作品に登場する三本足の図像などの独自の用語を使いながら、そうした融合ゆえに、彼の使う言語は誰にでも通じるコスモポリタン的なものとなっている。それは、通信やコミュニケーションの発達により世界中のさまざまな場所で同じ文化事象を共有することができるのと同時に、個々の文化の独自性の大切さが見直されている、そうした現代の様相を反映しているようにも見える。

「沖縄県芸術祭」（宜野湾市体育館、10月14〜18日）では根間智子「食指」など、新鮮な感覚の若手の作品が多く見られた。また写真展でも、たとえば「全琉球秀作写真選抜展」（那覇市民ギャラリー、10月13〜18日）の中の全国高校写真選手権大会作品などに見られる初々しさに、若い世代のこれからの可能性が感じられた。

（県立芸術大学助教授）